

ハーバード大学の日本研究

ハロルド・ボライソ（ハーバード大学）

私が勤めているハーバード大学における日本研究の現状を紹介するにあたって、私がまず皆さんに注意しておかなければならないことがございます。私がハーバード大学に勤めてからまだ四年足らず、ライシャワー研究所所長になってからたった半年。ですから、まだわからないことも多くて、誤解する、あるいはミソを付ける、その恐れがあります。その点、皆さんにお気を付けていただきたいと思います。

私が、知ってる限り、ハーバード大学における日本研究が本格的に始まったのは、昭和7年のことでした。そのとき、パリから呼ばれたセルゲイ・エリセーエフという人物が、東洋学科の教授になりました。皆さんもすでにご存じかと思いますが、エリセーエフ氏はロシア生まれで、明治の末期に東京帝国大学に入りました。留学時代に、日本の文壇でも活躍して、夏目漱石とか谷崎潤一郎とかいうような方々と親しくなったのであります。もちろん、東大を卒業したので、エリセーエフ氏は、とても日本語の上手な、日本文化も徹底的に理解した人でした。そのエリセーエフ氏が、ハーバード大学でつくった日本研究講座で、最初から日本語と日本文化に重点を置いたのは、恐らく当たり前のことだと思います。

しかし、エリセーエフ氏自身も強く革命以前のロシアの文化から影響を受けたので、もちろんヨーロッパ諸国の文化的な要素も含まれていました。と同時に、ハーバード大学では、相当前から中国の研究も進んで

いましたから、やはり日本研究は、東洋研究ないし中国研究の一部分という側面もありました。エリセーエフ氏の最も有名な生徒たるライシャワー氏の生涯に、いま私が述べたことが容易に見あたると思います。

日本生まれ日本育ちのライシャワー氏は、子供の頃から日本語が出来たのですが、ハーバード大学院に入ってから、エリセーエフ氏が強調した日本文化、ヨーロッパ文化、そしてハーバード大学の東洋学も、身につけたのです。大学院生として留学したのは東京、京都はもちろん、そしてパリと北京、学位論文は平安時代の坊さん、円仁の『入唐求法巡礼記』という日記の翻訳です。しかし、卒業して、学位をとってから、また第二次世界大戦が終わってから、ライシャワー氏は、今までとは全然違った道をたどるようになりました。一人でハーバード大学における日本研究の形を変えて、その範囲をもっと広くして、かつ中国研究から独立させたのです。ライシャワー氏自身は、ことに安保騒動のときからだんだんと外交・政治・経済問題に興味を持つようになって、とうとう昭和36年にケネディ大統領に在日米国大使に任命されたのです。

ライシャワー氏の日本滞在は、六年間でした。皆さんよくご承知のように、その六年間は、日本現代史において大変劇的な時代であって、今の日本の経済状態の出発点でもありました。そのとき、ライシャワー氏と会った政界・財界の方々が、後になってからハーバード大学のライシャワー研究所に援助を与えて、基金を作ったのです。要するに、ライシャワー氏の影響でハーバード大学における日本研究の形が変わってきました。

一方、戦前の文化・文学・歴史から、政治・経済・外交を含むようになって、それと同時に徹底的に名実ともに昔の東洋学から切り離されて、独立した日本学になりました。

エリセーエフ氏またはライシャワー氏のおかげで、戦後のハーバード大学は、米国の日本研究のセンターの一つとして、広く認められてきたのであります。それは疑いがないと思います。ハーバード大学で学位を取って、日本研究者として評判を得た学者は、実に多い。エール大学のジョン・ホール、プリンストン大学のマリウス・ジャンセン、カリフォルニア大学バークレーのトマス・スミスとドナルド・シャイブリー、ウィスコンシン大学のソロモン・レビン、みんなその第一世代であった。第二世代の中で、ハーバード大学のアルバート・クレイグ、スタンフォード大学のピーター・デュース、シカゴ大学のテツオ・ナジタ、エール大学のコンラッド・トットマン、サンディエゴ大学のジョン・ダーワ、コロンビア大学のヘンリー・スミスとか、数え切れないほど多いのです。米国の日本研究に対して、ハーバード大学の影響は実におびただしかったと思うのであります。

無論、現在ハーバード大学に勤めている先生方は、先輩の大業績を意識しながら、日本研究を続けるために出来るだけのことをいたしておりますが、米国における日本研究そのものは、ずいぶんその後、変わってきたのであります。ハーバード大学で学位を取った第一・第二世代の学者のおかげで、もう一つか二つの大学で日本研究を独占できるようになるとは、とても不可能になりました。考えて見れば、それはもったもなことでと思います。それでも、ハーバード大学は一流大学であって、その日本研究も一流でなければならないと思う。いつも、よりよく、より広く、より深い日本知識が育つようと、日本関係の40人以上の先生方が努力しております。日本の伝統的な文学・哲学・歴史などをやっていると同時に、現在の政治・経済・法律・言語学なんかも、やっております。

戦前の日本研究とは全く違うので、残っているのは、日本語の重大さ

だけなんです。今のハーバード大学の日本語教育は、大変いい成績をあげています。今年、学生数は270人、その過半数は、現在の日本を理解するために、日本語を習っています。そればかりではない。ほかに日本関係の科目では、同じように人数が増える一方ですし、例えば私が教える日本歴史講座、つまり織田信長から第三代の徳川家光までの90年間の歴史ですが、それを去年、学生が476人受けたのです。

最後に、ハーバード大学の日本研究にライシャワー研究所がどういう役割を果たしているのでしょうか。簡単に申し上げますと、大学での日本研究を支援する、それが第一目的。第二の目的は、広くニューイングランド地方における日本研究を奨励するということです。もちろん日本研究を支援・奨励するからといっても、それを支配するつもりは少しもありません。むしろそれより「基金」として活躍しております。「基金」として援助しておりますプログラムの中で、いくつかの例を挙げましょう。

たとえば大学生に対しては、三年生の優等生四、五人に卒論の準備ができるようにと、夏休みに日本で勉強させています。同じく、大学院の学生にも、学位論文を書くために、日本で勉強させております。それで、毎年、もうすでに学位を取った若い学者、それはハーバード大学に限らず、そういう学者にハーバード大学で一年間、ゆっくりと論文を本にするチャンスを与えております。と同時に、客員研究員の形で、ボストン市や、マサチューセッツ州、ロードアイランド州、コネティカット州の大学の先生30人以上が、研究所の活動に参加するようになっています。その場合には、研究室とコンピュータの設備も与えています。ほかに、ジャパン・フォーラムという講義のシリーズがあって、毎年12人まで全国から、あるいは外国から客員講師を呼んでおります。ライシャワー客

員教授制度もございます。それによって、よそからの有名な先生を一年間招待しています。今まで、その中でトマス・ロリーンとかロナルド・ドア先生に来ていただきました。ほかに、日米関係プログラム、それとハーバード・イェンチェン図書館、ハーバード・ユニバシティ・プレス、それと先生たちの研究にも援助をしております。

(1989年3月)